

チェルノブイリ通信

<http://www.cher9.org/>

NPO 法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒812-0013 福岡市博多区博多駅東 2-5-11-5F
TEL/FAX: 092-260-3989
E-mail: jimmu@cher9.org



チェルノブイリ医療支援ネットワーク (CMN) は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、
現地から求められる医療支援を行います。
この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心のつながりを深めます。

No.

110

特集 医療支援 20年とこれから

CONTENTS 実り始めた甲状腺がん早期診断・治療システム / ウラジーミル医師インタビュー / 矢板市甲状腺エコー検査に参加して / コラム ベラルーシの一日 / リュドミラ・ウクラインカ講演会とチャリティーコンサート案内 / 通常総会報告 / 支援者のお名前とメッセージ



広場にある馬車のブロンズ像で遊ぶ子どもたち (ミンスク市内)

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

郵便振替口座 01770-1-65328
他の金融機関からは 一七九支店 (当) 65328
楽天銀行 ジャズ支店 (支店番号 201) (普) 7017104
住信 SBI ネット銀行 法人第一支店 (支店番号 106) (普) 1030416
※口座名はいずれも「NPO 法人チェルノブイリ医療支援ネットワーク」

実り始めた甲状腺がん早期診断・治療システム

1997年に、被災者の甲状腺がんをテーマに医療支援に取り組み始め、20年になります。この間、現地ベラルーシの状況の変化に合わせて、医療支援の内容も変化してきています。これまでの歩みとこれからの課題について考えます。

(チェルノブイリ医療支援ネットワーク)

子どもたちを救え！

市民の声で生まれたNGO

チェルノブイリ医療支援ネットワーク(旧名称:チェルノブイリ支援運動・九州)は、1990年、市民有志によって発足しました。

現地からの情報が限られる中、真っ先に放射能の影響を受ける子どもたちを救うこと、必要な支援を必要とするへ届けることを当初のテーマに掲げ、ウクライナやベラルーシで、現地の新聞社や市民グループ、医療機関を通じて、医療器具や放射能測定器などの物資支援、転地保養施設「サナトリウム九州」運営などに取り組みました。

小児甲状腺がんの増加と医療環境の遅れ

ベラルーシは、国土の3分の1がチェルノブイリ原発事故による放射能で汚染されたと言われ、最大の被ばく国となりました。

事故から5年後の1991年には、子どもたちの間で甲状腺がんが見つかり始め、1996年には、WHO(世界保健機関)やIAEA(国際原子力機関)などが、チェルノブイリ事故と小児甲状腺がん増加との因果関係を認めるようになりました。

小児甲状腺がんは、通常は100万人に1人か2人と言われるくらい、めずらしい病気です。事故後、ピーク時で100万人に対し40人(95年)にまで急増したベラルーシでは、診断体制が整っておらず、医療機器も不足。発見の遅れによる、他の臓器へのがん転移や誤診も多くありました。

さらに、被災地である地方と、首都



97年7月、ストーリー第1回検診メンバーと雪だるま号



2000年10月、清水医師によるストーリーでの検診



98年10月、エコーでの診察方法を教える武市医師

これまでの主な活動のあゆみ

支援活動 はじまる	1986年 チェルノブイリ原発事故が起きる 1990年 「チェルノブイリ支援運動・九州」が発足 ウクライナ・ベラルーシへ調査団派遣、物資支援開始 1992年 ベラルーシで「サナトリウム九州」運営開始（～1996年） 1995年 作文集『わたしたちの涙で雪だるまが溶けた』発行 1997年 ベラルーシ赤十字へ移動検診車「雪だるま号」贈呈
甲状腺がん患者支援 を活動の柱に	甲状腺がん早期診断・治療システム確立のための医療支援開始（1997年～プレスト州ストーリン地区、2002年～プレスト市） 2001年 福祉工房「のぞみ21」、現地NGO「コンフィデンス」支援開始 2004年 移動検診車「雪だるま2号」贈呈 2007年 NPO法人化し「チェルノブイリ医療支援ネットワーク」へ改名 アレーシャが日本医科大で甲状腺手術を受ける
内視鏡手術・ 細胞診向上へ	2009年 ミンスク市で清水医師による甲状腺摘出手術を初めて実施 2011年 東日本大震災発生 2012年 テキスト『甲状腺の細胞診』ロシア語翻訳版完成、贈呈



上から／ウラジーミル医師による吸引穿刺を見つめる清水医師（2000年10月）、細胞診教科書をロシア語に翻訳し贈呈。渡會臨床検査技師とプレスト州立病院アルツール院長（2012年9月）



ミンスクにある中央の医療機関との技術格差も深刻でした。ゴメリ州やプレスト州など被災地の患者は、精密検査や手術のため数百キロ離れたミンスクまで通う必要があり、患者の経済的、肉体的な負担にもなっていました。

小児甲状腺がんの医療支援を活動の柱に

移動検診車で被災者のいる地方を回り甲状腺検診を行うことで、早期にがんを発見し治療につなげる。被災地と中央の医師が参加し、現地の医療機関の連携と人材育成を図る――。

被災地に何度も足を運んでいたロシア語医療通訳・コーデイネーターの山田英雄さん、広島市の武市宣雄医師（武市クリニック院長）らから、甲状腺がんをテーマにした被災者医療支援プロジェクトの提案を受けたのは、1996年のことでした。

甲状腺がんのほとんどは進行が遅く、早く見つけ、早く治療を始めれば命を落とさずに済みます。現地に高い診断技術が定着すれば、多発する甲状腺がんの早期発見と誤診防止につながり、被災者の命を救うことができる。専門家の助言と協力を受けて、翌1997年から、移動検診車導入による小児甲状腺がん早期診断・治療システムの構築を目指した医療支援を開始。

今から20年前、甲状腺がんに着目し、医療支援に取り組む民間NGO団体はほとんどなく、手探りの中でのスタートでした。

プレスト州での

甲状腺検診開始へ

こうして、日本の甲状腺の

専門医と臨床検査技師、首都ミンスクの中央基幹病院の医師、被災地プレスト州の医師が参加し、3者による合同検診が始まりました。

各国の支援が汚染度の高いゴメリ州に向かう中で、汚染地でありながらまだ支援が遅れていたプレスト州から取り組むことになり、97年から最初の5年間は、プレスト州ストーリーリン地区に拠点を置き、夏・冬の年2回検診団を派遣しました。

日本からは年に百数十人しか検診できない中、活動の質を高めてくれたのは、被災地で日常的に移動検診を行う「プレスト州国際赤十字移動検診チーム」の存在でした。ウラジーミル・シウダ医師らは、州立病院と連携して州内をくまなく回り、町や村で甲状腺検診を行っていました。

この移動検診チームが被災地で一次スクリーニングを行い、そこで見つかったがん疑いのある患者に対し、日本からの検診団の訪問に合わせて二次スクリーニングを実施。その診断方法や診断結果を確認、共有するという流れが定着しました。

2002年からは州都プレスト市で

合同検診を行いました。州内の甲状腺に関する治療の中心である、プレスト州立内分秘診療所に新たに拠点を移すことで、より安定的に技術の伝達ができ、州内全域の患者をカバーできるようになりました。

■ 現地医師の技術向上と残された細胞診の課題

現地での甲状腺がんの検査は、患者の喉に指を当てて甲状腺の状態を調べ、触診に続いて、エコー（超音波診断装置）検査を行い、もしがんの疑いのある部分があれば、注射器のような器具でその部分の細胞を取り出し、顕微鏡でがん細胞の有無を確認するという流れで行います。

「穿刺吸引」と呼ばれるこの方法は、当時のベラルーシではまだあまり一般的ではありませんでした。重要な血管や神経の通っている首に注射針を刺す高度な技術が必要であり、根気強く、検診と診断技術を伝えながら、毎年の検診を続けました。

その甲斐あって、現地医師の技術向上はめざましいものでした。ストーリーリン地区で検診を始めた頃は、日本の医

者が吸引穿刺を行う姿を、現地の医師が周りで見ている形でしたが、6年後にプレスト市に拠点を移す頃には、ベラルーシの医師が自ら実施するようになっていました。

プレスト州の関係医師の技術の高さは、ベラルーシ国内でも知られるようになり、ビテフスク州など他の州の医師らが研修に訪れるまでになっていきます。日本との合同検診に参加した医師は、さらに若い医師にも技術を伝え、第二世代、第三世代へと人材育成は進みつつあります。

このように、当初の目的の一つだった甲状腺がんの早期診断は、ある程度は達成できつつあると言えます。

その一方で、吸引穿刺で取り出した細胞を正確に診断するという、病理面ではまだ十分に現地医師の育成が果たせていない状況です。

2012年には、細胞診の教科書『甲状腺の細胞診』を、ロシア語に翻訳してベラルーシ側へ贈呈するなど、この課題解決への取り組みを始めていますが、まだ道半ばです。細胞診で用いる効果的な細胞染色方法であるギムザ染色法の定着、手術前のプレパレートと



2012年10月、現地医師による吸引穿刺を見守る日医大の学生



吸引穿刺を受けた患者にインタビューを行う山田英雄氏

手術後の結果の照合、診断症例の整理など、今後は細胞診技術の向上が課題です。

甲状腺内視鏡手術の技術向上支援へ

2009年には、新たに、甲状腺内視鏡手術の技術向上と人材育成に取り組み始めました。

内視鏡手術には、傷が小さく、出血も少ないため、患者の負担が少なく回復が早いというメリットがあります。一方で、小さな内視鏡カメラを使い手術するため、高い技術が求められます。



上から／プレスト州立病院にて甲状腺内視鏡手術をイーゴル医師に指導する清水医師（2016年4月）、同州立悪性腫瘍病院でのシンポジウムに聞き入る若い医師ら（2017年9月）

実施するようになっていきます。

福島第一原発事故

以後の動き

「同じ放射能に苦しむ東日本震災被災者の支援を」との会員の方々からの声を受け、2013年からは、日本国内で活動する東日本震災被災者支援グループ支援や、スタッフによる被災地訪問と調査、報告会や講演会開催などにも取り組んでいます。

また、獨協医科大学国際疫学研究室の木村真三準教授とも連携し、現地の医学シンポジウムで福島について報告いただいたり、日本国内での講演会を開催するなど、取り組みを進めています。

さらに昨年から、島根大学医学部の野宗義博先生や医学生、研修医が参加する、関東や東北における甲状腺検診の支援を開始しています。

医療支援のこれから

会員の皆さまから寄せていただいたご寄付は、検診や手術の場を通じた現地医師育成だけでなく、エコーや顕微鏡、検査試薬や消耗品、赤十字移動検診車の維持費などの形で、チェルノブ

イリ被災者が安心して生活することができる環境整備につながっています。

その一方で、前述の細胞診の技術向上はこれから取り組むべき課題の一つです。10年以上前に支援物資として届け、病院でフル稼働してきたエコーや顕微鏡などの医療機器も、現在老朽化が課題となっています。月に何百キロと走るプレスト州赤十字の移動検診車も、老朽化により買い替えが必要な時期にきています。

事故から32年を迎え、子どもの頃に被ばくしたリスク・グループと呼ばれる世代は、がん発症確率が高まり始める40歳前後になり、専門家の間でも被ばくの影響が懸念されています。「まだ」32年であり、今後も注意深く見つめ、支えていく必要があります。点から線、線から面へと、被災地全体の医療を底上げし、困難な中に生きる被災地の方々を支えるため、また、チェルノブイリの経験を日本国内で活かしていくため、何ができるのか真摯に考え、取り組んでいきたいと考えています。どうぞ引き続き、チェルノブイリ医療支援活動をお支え下さいますよう、心よりお願い申し上げます。

ブレスト州内分泌診療所
国際赤十字移動検診チーム

ウラジーミル・シウダ医師に聞く

医療支援ネットワークは、ブレスト州の国際赤十字移動検診チームと連携し、甲状腺がんの早期発見・治療システム確立に取り組んできました。ブレスト州立内分泌診療所に所属し、この移動検診チームで活躍するウラジーミル医師に、お話を伺いました。

(取材/田中 仁)

患者さんの異変を早期に発見 事故の影響は30年以上経つ今も

ブレスト内分泌診療所での主な仕事は、どのようなものですか？

我々の診療所は、主に糖尿病患者と甲状腺、その他内分泌系の病気にかかった患者への特別な治療を行っています。内分泌系異常の病気はすべて診てきていますが、その中でも、1986年の事故当時に子供だった世代の甲状腺がんは、特にチェルノブイリの影響があると考えられます。

私達の重要な活動の一つとして挙げられるのが、患者さんの甲状腺

検診を受ける患者の出身地は？

私たちの診療所に通うのは、ブレスト州の患者が多数です。しかし希望すれば、海外からも診察を受けることができます。例えばロシア、ウクライナ、ポーランドからもあります。

ブレスト州に住む患者は無料で診察を受けることができますが、他の州や海外からの患者の診察は有料となっています。事前の登録によって、それぞれ希望の治療を受けることができます。

現在のチェルノブイリ事故の影響をどう考えますか？

チェルノブイリ事故から30年以上が経った今でも、影響は残っています。それどころか、チェルノブイリ事故後に生まれた世代の発症率の上昇が見られるという、新たな問題も出てきています。

環境問題によって起こるこういった状況は、おそらく世界中でも見受けられます。ブレスト州のそれぞれの地区には内分泌医がいて、そ

国際赤十字移動検診チームは、どんな活動をされていますか？

それぞれ大きな異常が見つかった患者を、我々のところへ診察・検査に送るシステムとなっています。

今から20年前、ブレスト州や赤十字の協力を得て、この内分泌診療所に移動検診車が設けられました。そして日本の皆さんと知り合い、今日では診療所でも移動検診ラボでも



移動検診車の前に立つウラジーミル医師。日本からの合同検診には、97年のストーリン地区第1回検診から協力、参加している。



日本からの検診団訪問に参加するウラジーミル医師。甲状腺の細胞の染色を行う様子（左）
白いヒゲと帽子、パイプたばこがトレードマーク（右）

日本から学んだ穿刺吸引 医療機器支援で迅速な検査が実現

行われている、穿刺吸引などの高い技術を学びました。

私自身も、20年以上移動検診車でブレスト州の様々な地区をまわりながら、診察を行っています。ブレスト市に戻るのには、一週間の成果報告をする月曜日のみです。

車の中に検診施設はあるけれどもつたに使用することはなく、普通は地域ごとにある病院・学校の一室を借りきって行います。患者が多いときには、何日も滞在して全員を診ます。その際には病院の宿泊寮に宿泊します。

将来のビジョンは？

今後のプランとして考えているのが、糖尿病予防です。これはとても難しい問題で、生活そのものからきています。特に二型の糖尿病の発症率は、世界中で広がっています。お店には添加物の多いもの、甘いものが並び、自分をコントロールする

のが難しくなってきた状況です。

そこで人々が糖尿病にかからないように、食事療法等で事前に生活改善指導するというのが、二年前から始めている私たちの新たな事業です。

リスク別にグループに分け、甲状腺の治療と並行して、正しい食事療法・生活習慣を教えています。人のメンタルの部分を変えるこの作業は大変難しいもので、特に癪を直すというのは極めて困難です。しかし、こういった健康診断には、健康な人間でも4年に一回は来てもらいたいものです。

特に事故の起こった86年に子供だった世代、病気持ちの人は、頻繁に診てもらう必要があります。

日本からの支援物資について

日本から頂いた医療機器はとても質がよく、スムーズかつ迅速に検査ができるようになり、難しい問題を解決する助けとなっています。

現在、一番必要としている支援は新しい検診車です。私達が今使用している車はとても古く、いつも修理に出さなければならぬ状態です。将来的には、古くなったエコー検査機器も新しいものがが必要です。

福島へのメッセージをお聞かせ下さい。

チェルノブイリから福島復興へ伝えられる大事なことの一つが、常にコンタクトをとって提携すること。我々はいつともその議題を話し合っているし、アルツール院長と私には実際に現地へ行きレクチャーも行いました。みんなが協力することがとても大事だと思います。

検診車やエコーの老朽化が課題 福島復興について協力が大事

医学を学ぶ身として感じたこと

― 矢板市甲状腺エコー検査に参加して ―

島根大学医学部医学科5年 大滝聡美

2017年11月11日、12日の両日、島根大学医学部特任教授野宗義博先生に同行し、栃木県矢板市で開催された甲状腺エコー検査に参加させて頂きました。2日間と短い日程でしたが、甲状腺エコー検査矢板実行委員会の方々の尽力により、事前に地域一円に告知が周知されており、110名の子供



さんとそのご家族が健康診断会場を訪れ、大盛況の中でエコー検査が実施されました。

今回現地に入るまで、東日本大震災で被災された方の健康については、新聞報道程度の知識しか持ち合わせていませんでした。現地に行かせて頂き、東日本大震災から6年以上たった今でも、子供の健康を守るために地域のお母さん方が中心になって、有志の健康診断を継続して開催されていらっしゃることに深く敬意の念を持ちました。

今回の検診同行を通して、野宗先生から日頃の病院実習に加えて様々な教えをうけることが出来ただけではなく、現地ボランティアの方々や、調査をされている先生ともお話をさせて頂く機会に恵まれ、見識がとても広がりました。また、矢板市とその周囲に住まいの子供さんやそのご家族ともお話することが出来、大変勉強になりました。

チエルノブイリ医療支援ネットワークでは、島根大学野宗義博先生が参加する関東・東北での甲状腺検査を支援しています。昨年11月実施の際に同行された大滝さんからの報告をご紹介します。

また今回、医師の存在価値とは何かということを改めて考える機会となりました。医師に期待されていることは、目の前にいらっしゃる方に何か異常がないか診察を肅々とこなし、いき、異常があるかもしれない人には必要な対応を迅速に行い、問題がない方には診察をすることで不安を解消することだと感じました。確かに、このようなおことは医師にしかできないことなのだと痛感しました。

今回の健康診断に参加させて頂くことで、医学を学ぶことを許された者に課せられた社会的期待と責任を改めてかみしめました。これから更に一生懸命に勉強をし、知識を詰め込み、手技を磨き、経験を積み、社会に少しでもお返しできるような医

師になるべく、引き続き努力をしなければならぬと気持ちを新たにしました。

末尾ですが、このような活動を続けられていらっしゃる関東子ども健康調査支援基金の皆さま、甲状腺エコー検査実行委員会の皆さま、また私たちの参加を支援下さったチエルノブイリ医療支援ネットワークの会員の皆さま、今後の益々のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。



ジャーナリストとして汚染地復興支援

ウラジーミル・スヴォット・バーヴラヴィッチさんを訪ねて

ベラルーシ訪問の際、現地通訳として活動に協力いただいている田中仁さんのコラム連載をスタートします。今回は、事故直後から被災地の取材を続けてきた、元ジャーナリストで現在大学助教授のウラジーミルさんのお話です。

■冬のベラルーシより

雪が積もり銀世界となつてゆく、12月のベラルーシ共和国首都ミンスク。町では新年、カトリック（12月25日）とロシア正教（1月7日）のクリスマスを祝うツリーも飾られてきています。

そんな雪国のチェルノブイリ取材で出会ったのは、とてもあたたかく大きな人物でした。

彼の名はウラジーミル・スヴォット・バーヴラヴィッチ、67歳、ブレスト州ストーリン地区出身。チェルノブイリ事故直後に、汚染地域からジャーナリストという立場で現場復興を支援してきた人物です。現在は、ベラルーシの時事解説者・国立大学報道理論研究科助教授として働く彼が、当時の体験を語ってくれました。

■事故直後の汚染地取材

「1986年4月26日の原発事故発生の一ヶ月後、ベラルーシ国営ラジオ局で働いていた私は、ブラーギン地方（チェルノブイリから58km）にリポーターとして送られました。毎日、事故現場から15〜30kmの地域まで行き、汚染物除去作業の状況や住民の声を届けました。

避難勧告が出て、故郷を捨てなければならなかった彼らが泣き叫んでいた光景は、今でも忘れることができません。住民たちからは、穏やかな天気が続く、鳥の気持ちはいい鳴き声が響く場所からなぜ退去しなければならないのか、納得できない様子でした。

それでもメーターは高い放射能濃度を計測し、避難民や車両は、特殊な溶液を用いて放射能の洗浄をされていました」。



ウラジーミル・スヴォット助教授



ウラジーミルさんがベルギーのテレビ局の監督と共にチェルノブイリ事故30キロ圏内を訪問（ウラジーミル氏より提供）



上から／1991年のウラジーミルさん司会のチェルノブイリ問題検証テレビ番組生放送の様子。ベルギーのテレビ局の監督とブラーギンで。《いずれもウラジーミル・スヴォット氏より提供》

■放射能にさらされて

事故直後から約一ヶ月間、汚染地域に滞在しながら報道活動に携わっていたウラジーミルさん。その後、大きな病気になることがなかった彼は、ある習慣が偶然にも自分を放射能から守ってくれたと言います。

「放射能の怖さは分かっていたつ

もりでした。危ないと言われていた汚染地域のリンゴを食べていた知り合いの男性は、その3年後に腫瘍が原因で若くして亡くなりました。現地のおばあさん達のやさしい心遣いを断れず、私も汚染地域の牛乳やジャガイモをこちそうになっていました。

当時、水虫にかかっていた私は、何も知らず足にいつもヨードを塗っていました。それが放射能汚

染から救ってくれることになるとは知らずに。よくスイカを食べて赤ワインを飲んでいたことも幸いしたのかもかもしれません。事実、共に派遣されたラジオ局の仲間4人は、その後長くは生きられませんでしたが、今日では私だけが生き残っています。

ただミンスクに戻った後の検査では、足の骨にストロンチウムがかなり蓄積されていることが判明し、しばらくは痛みで歩けませんでしたが。今でも、体からストロンチウムが完全に消えることはありません。しかし、甲状腺の異常など致命的なことにはならずに済みました」。

■子供たちの支援活動

その後、ミンスクでテレビの制作・司会者となったウラジーミル・スヴォットさんは、自身の持つ番組の中でチェルノブイリのテーマを追い続けます。

「テレビ局で働くようになった私は、1989年から15年間続いた

週間番組《チェルノブイリ問題と解決》の担当となりました。特に放射能被害がひどかった子どもたちにスポットを当て、病気にかかっている子どもたちを治療のためにヨーロッパへ送ったりしていました。

ナターシャという、まだ3才だった女の子が、甲状腺がんに苦しむ姿を目にした時は、涙が止まりませんでした。母親に泣きついて助けを求められた私たちは、必死に保健省に頼み込んで、その子をドイツへ治療に送ることができました。

12年後、少女がどうなったのかを確認しに、母と住んでいるはずのゴメリ州スベトラゴルスクの町を訪ねました。玄関のドアを開けてくれたのは髪が真っ白になっていた母親でした。少女の生死を質問できないでいましたが、彼女自身が私たちのことを娘の命の恩人として覚えてくれました。ドイツで手術を受けたナターシャはその後、結婚して幸せになりました。

逆に、病院での検診が1カ月遅れたばかりに、腫瘍で亡くなってい

た子のことも忘れられません。それでも子どもたちが感謝の気持ちを含めて書いてくれた手紙や絵は、私の宝物として家に保管してあります。

90年代に、番組の中でベラルーシの全6州から集めた食料品(牛乳、肉、野菜等)の放射能数値をスタジオ検証する番組を始めました。ゴメリ(ブレスト州)の食品から危険な値が検出され、その情報をテレビで流すことは国民が健康を管理する手助けとなりました。

■学生ツアーで伝える復興

現在、大学の教壇にも立つウラジーミルさんは、学生に様々な悲劇を乗り越えてきれいになったベラルーシの名所や自然を見学するツアーを提案しています。ミンスク近郊では、世界遺産の《ミール地方の城と関連見物群》と《ニヤスビシユ宮殿》が彼のお勧めです。2016年の春は、中国からの留学生たちを連れてチェルノブイリ観光にも行ってきました。

「マイクロバスで、事故現場から50〜60km付近のところまで行きました。今では人々が普通に暮らし

て、子どもたちも学校に通えるようになったかかつての汚染地域を見た留学生たちは、ショックを受けていました。現在、そのゾーンを訪問するのは安全だと考えられています」。

■日本へのメッセージ

放射能被害に苦しむ人々を直に見てきて、自身も多くの親戚をチェルノブイリ事故で失ったウラジーミルさん。これからの若い世代には同じ悲しみを味あわせたくない、との思いの彼から、日本へのメッセージを頂きました。

「チェルノブイリ事故後、広島・長崎の被害を知る彼らが、いち早く我々のところに駆けつけて支援してくれたことに感謝しています。1997年には、ベラルーシ、ロシア、ウクライナ、ドイツ、フランス、オーストリア、日本の合作で《チェルノブイリから10年》というドキュメンタリーを制作したこともあります。2000年に、浦上天主堂から贈られた長崎の鐘がミンスクの聖シモン・聖エレナ教会に建てられた時出席しました、福岡からの医療支援のことも

有名です。我々の経験から福島復興に伝えられることがあるとすれば、汚染後の生活の仕方。大事なものは牛乳、野菜、果物などの放射能検査を徹底して、発病を予防していくこと。日出不ずる国、日本の太陽が沈まないように応援していきたいです」。

■取材を終えて

日本とベラルーシの国交が結ばれて、25周年にあたる2017年から、両国の行き来がしやすくなってきました。2月に、日本も含めた80か国からベラルーシへ

の5日間ビザなし渡航が可能となり、2018年1月1日から、ベラルーシ国民の訪日ビザ取得簡素化が施行されることに決まりました(2017年12月15日のニュース)。このように、長いこと協力し合ってきた日本人とベラルーシ人の交流の場は広がり、お互いをより身近に感じられるようになっていきます。

田中仁(たなかひとし) / ミンスク大学卒業後、フリーランスのジャーナリスト、通訳として国内外の雑誌やテレビで活躍中。ミンスク在住。

上から/世界遺産 2000年登録のミール城、世界遺産 2005年登録のニヤスビシユ宮殿外観



全国報告会とチャリティコンサート

2018 年
5 月

「チェルノブイリ」から32年 被災地ベラルーシからゲストを迎え 全国4都市で報告会を開催します

今年で、チェルノブイリ医療支援ネットワークが医療支援を活動の柱に据えて21年目になります。また前身の「チェルノブイリ支援運動・九州」からNPO法人化し、「チェルノブイリ医療支援ネットワーク」として新たなスタートをきって10年目となります。

この節目に当たり、改めて全国のみなさんと共に、「チェルノブイリ」を考えるため、ベラルーシ共和国からゲストを迎え、全国4都市で、講演会やチャリティコンサート形式でのトークイベントを開催します。

ゲストのリュドミラ・ウクラインカ(愛称リュード)さんは、10歳の時にチェルノブイリ原発事故を経験し、何も知らないまま被ばく。その後受けた甲状腺摘出手術の経験を活かして、手術や病気を経験した子供や女性の心のケアをする心理カウンセラーの道を選び、活動されています。一人の女性がどうチェルノブイリを経験し、「今」を生活しているのか、リュードさんをお話から一緒に考えます。

◆特別ゲスト◆



リュドミラ・ウクラインカさん
Ludmila Ukrainka

10歳の時、チェルノブイリに近いモギリョフの祖母の家で被ばく。15歳の時甲状腺に結節が見つかり、その2ヶ月後に手術。のちに摘出手術は不要だったと知る。

突然の手術と術後の傷という深い心理的ショックを体験し、私ならば同じ境遇の子供たちの心を理解して手を差し伸べられるはずと、カウンセラーの道を決意。ミンスク教育大学医療心理学へ進み、暴力を受けた女性や手術の後心の傷の癒えない子供たちのケアに当たっている。

愛称リュード。現在は愛娘のアンナちゃんと首都ミンスクで暮らす。41歳。

各会場の企画内容

2018年5月

13日(日) 《福島》
リュードさんと木村先生の講演会
特別講演 木村真三先生



獨協医科大学国際疫学研究
室准教授。専門は放射線衛生学。

15日(火) 《東京》
ピユツフェ付き
チャリティコンサートと
リュードさんのお話

ピアノ演奏 久保山菜摘さん

16日(水) 《広島》
サロンコンサートと
リュードさんのお話

ピアノ演奏 岡崎清香さん



エリザベト音楽大学に特別奨学生として入学。第41回ピティナピアノコンペティション連弾上級全国決勝大会金賞ほか多数受賞。

18日(金) 《福岡》
チャリティコンサートと
リュードさんのお話

ピアノ演奏 久保山菜摘さん



1992年生まれ。2016年ザルツブルクモーツァルト室内楽コンクール1位ほか多数受賞。小学6年生よりチャリティコンサートを開催。2015年桐朋学園大学音楽学部ピアノ科を首席で卒業。

19日(土) 《福岡》
リュードさんとの交流会

各会場の詳細

福島

《講演会》

5/13 (日)
13:30 ~ 16:00

会場
安積総合学習センター
集会室
福島県郡山市安積町荒井南赤坂
265 TEL 024-945-6466

講演会 「甲状腺がんの不安」について考える

リュドミラ・ウクラインカさん講演と、木村真三氏（獨協医科大学准教授）、山田英雄氏（ロシア語医療通訳・コーディネーター）による鼎談を予定。

■入場／無料 ■定員／144名

問合せ

TEL 090-7663-1566
(講演会実行委員会 吉川)

東京

《ビュッフェ付 チャリティーコンサートと講演》

5/15 (火)
開場 18:30
開演 19:00

会場
レストランカフェ Blue-T
東京都渋谷区笹塚 1-61-8 ビジネスホテル プーゲンピリア新宿 1階
TEL03-3375-1474

第14回 久保山菜摘チャリティーコンサート ～ベラルーシよりリュードさんをお迎えして～

ビュッフェ形式で楽しむ、ピアニスト久保山菜摘さんによる演奏とリュドミラ・ウクラインカさんのトーク。お食事と音楽を楽しみながら、チェルノブイリを考えてみませんか？

■入場料／3,500円（食事代含む）
■定員／50名 ※席に限りがあります。お早めにお申込下さい。

問合せ

FAX 092-552-8138（セルクルジャパン）
TEL 090-7384-0405（久保山）

広島

《サロンコンサートと講演》

5/16 (水)
開場 18:00
開演 18:30

会場
カワイ広島コンサートサロン
パーチェ
広島市中区紙屋町 2-2-6 紙屋町
イワミビル TEL082-243-9291

岡崎清香サロンコンサート ～ベラルーシよりリュードさんをお迎えして～

ピアニスト岡崎清香さんによるサロンコンサートと、リュドミラ・ウクラインカさんのトークです。

■入場料／1,000円 ■定員／50名（要申込）

問合せ

TEL 080-5233-1297（岡崎）
Email contact@arcobaleno.me（アルコバレノ）

福岡

《チャリティーコンサートと講演》

5/18 (金)
開場 18:30
開演 19:00

会場
あいれふホール
福岡市中央区舞鶴 2-5-1 福岡市
健康づくりサポートセンター 10F
TEL092-751-2827

第14回 久保山菜摘チャリティーコンサート ～ベラルーシよりリュードさんをお迎えして～

ピアニスト久保山菜摘さんによるコンサートとリュドミラ・ウクラインカさんのトーク。ゲストに、ソプラノ歌手の渋谷ちかさんをお迎えします。

■入場料／一般3,000円 学生2,000円(当日各500円増)

問合せ

FAX 092-552-8138（セルクルジャパン）
TEL 090-7384-0405（久保山）

ボランティアスタッフ募集

各地での開催に協力いただける、ボランティアスタッフを募集しています！事務局までご連絡、お問合せ下さい。

- チラシを預かっていただける方
- チラシ配布や告知に協力いただける方
- チケットを預かっていただける方（東京・福岡）
- 当日会場設営や受付などを手伝って下さる方

■すべてのお問い合わせ

チェルノブイリ医療支援ネットワーク

TEL/FAX 092-260-3989

Email jim@cher9.org

福岡

《交流会》

5/19 (土)
18:00 ~ 20:00

会場
福岡 NPO 共同事務所
「びおとーぷ」
福岡市博多区博多駅前 3-6-1
小森ビル 4-A

チェルノブイリを考える交流会 ～リュードさんを囲んで～

リュードさんとゆっくり話したい！という方へ、気軽に参加いただける、交流会スタイルでの小さな集まりを企画。お茶を飲みながら交流を楽しみましょう♪スタッフも参加します。

■参加無料 ■定員／10名程度（要申込）

問合せ

TEL 092-260-3989 Email jim@cher9.org
(チェルノブイリ医療支援ネットワーク)



最新情報はホームページ、Facebook にも掲載！
「チェルノブイリ 医療支援」で検索

<http://www.cher9.org/>

2月

24日(土)、福岡NPO・ボランティア交流センター「あすみん」にて、2018年度通常総会を開催し、昨年度の事業報告・活動決算報告および、今年度の事業計画・活動予算、定款の変更についての協議、承認が行われました。前年度の事業報告および今年度の事業計画について、簡単に紹介させていただきます。

詳しい総会資料は、団体ホームページでも公開しています。ご希望の方には郵送しますので、事務局までお気軽にお知らせ下さい。

◆総会資料掲載ページ http://www.oher9.org/kako_katudo.html

2017年度事業報告

一 チェルノブイリ原発事故の被災者及び被災地に対する支援事業

■ベラルーシ訪問事業

◎期間…二〇一七年九月十六日(土)～十月一日(日)

◎訪問先(現地カウンターパート)

ブレスト…ブレスト州立内分診療所、ブレスト州立病院、

ミンスク…ベラルーシ赤十字、10番病院、医学再教育アカデミー、のぞみ21、NPOコンフィデンス

◎訪問者…河上雅夫(理事)、山田英雄(医療顧問)、清水一雄(金地病院名誉院長)、木村真三(獨協医科大学)、千葉百子(順天堂大学※自費参加)、田中仁(通訳)

■被災者と障害者による福祉工房(のぞみ21)支援事業

◎活動支援

◎木工品やリネン製品の仕入れ、国内での販売

■現地グループ「コンフィデンス」支援 ◎保養や健康プログラム等の活動支援

二 日本国内での原子力災害などによる被災者及び被災地に対する支援事業

■東日本大震災に対する支援事業

◎東北・関東地域で実施する被災者向け甲状腺がん検診への研修医・医学士の旅費支援、スタッフ参加

・検診実施日程・場所…二〇一七年四月二十二日～二十三日(福島県郡山市)、六月二十四日(福島県いわき市)、七月八日～九日(栃木県益子市)

市)、九月九日～十日(横浜市、相模原市)、十一月十一日～十二日(栃木県矢板市)

・河上(理事)、山田(医療通訳)参加 ◎宮崎市で開催された日本衛生学会学術会議における市民国際講座へのスタッフ参加x

■被災地の状況や被災地支援に関する交流支援

◎第四回島根セメイ国際シンポジウムの開催費支援、スタッフ参加

・ウクライナ国立小児産婦人科研究所のザドロージナ教授の渡航費支援

・河上(理事)、山田(医療通訳)参加 三 被災者及び被災地の現状を周知するための普及啓発事業

■「チェルノブイリ通信」発行事業 ◎年四回発行

・発行時期…三、六、九、十二月

・発行部数…一九〇〇～二四〇〇部

■その他の情報発信事業 ◎団体ウェブサイトの運営、情報発信 ◎イベント等での活動紹介

四 フェアトレード事業

■物品販売事業

◎チェルノブイリ支援コピー、紅茶の販売

2018年度事業計画

2018年度も、引き続き専門家との連携のもと、ベラルーシ共和国での医療活動を継続してまいります。また、震災支援事業として国内での甲状腺検査のサポートを行います。必要に応じて現地を訪問し、情報収集と発信に努めます。また会員の皆さまへの活動報告を充実させ、大きな事業の1つとして、ベラルーシからリュドミラ・ウクラインカさんを招き、福島、東京、広島、福岡で講演会とコンサートを行います。

今後も被災地から必要とされる支援活動を展開し、会員やご支援下さる皆さまへの説明責任を果たし、現地の様子と事業の成果をお伝えできるよう、スタッフ一同頑張っております。

帰国報告会も開催

通常総会後、理事の河上より、昨年9月のベラルーシ訪問についての帰国



報告会も開催。写真を交えてチェルノブイリ医療支援20年のあゆみをふり返りながら、今回の検診の様子を報告させていただきました。

理事 平川 可南子、和田 幸策、中山 悠、河上 雅夫、川原 秀之、小川 峰湖
 監事 三島 さとこ

2017年度活動決算書(2017/1/1～2017/12/31)及び2018年度活動予算書(2018/1/1～2018/12/31)

(円)

科目	2017年度決算		2018年度予算	
経常収益				
1. 受取会費				
正会員受取会費	78,000	78,000	72,000	72,000
2. 受取寄付金				
活動支援金	8,607,154		6,200,000	
のぞみ21カンパ	33,300		100,000	
雪だるま3号カンパ	40,000		100,000	
震災支援カンパ	334,714	9,015,168	600,000	7,000,000
3. 事業収益				
のぞみ21支援事業	57,460		60,000	
フェアトレード事業	704,188		700,000	
小計		761,648		760,000
4. その他収益		17,520	8,000	8,000
経常収益計		9,872,336		7,840,000
経常費用				
1. 事業費※1)				
訪ベラ事業	2,954,188		3,365,441	
のぞみ21支援事	844,647		732,040	
震災支援事業	386,180		720,154	
会報発行事業	1,797,170		1,709,877	
イベント企画・運営事業	0		1,362,945	
その他情報提供事業	18,907		24,782	
フェアトレード事業	614,777		640,182	
事業費計		6,615,869		8,555,421
2. 管理費				
人件費	7,920		9,322	
その他経費	125,511	133,431	104,257	113,579
経常費用計		6,749,300		8,669,000
当期経常増減額			3,123,036	-829,000
税引前当期正味財産増減額			3,123,036	-829,000
法人税、住民税及び事業税			70,100	71,000
当期正味財産増減額			3,052,936	-900,000
前期繰越正味財産額			20,448,462	23,501,398
次期繰越正味財産額			23,501,398	22,601,398

※1) 人件費(給料手当、雑給、法定福利費、支払報酬)を含めた金額です。また水道光熱費や支払地代家賃等の共通経費も按分されています。

開催
 予告

8月福岡で講演会を開催します

ベラルーシでの医療支援活動に協力いただいている清水医師、渡會検査技師による報告会・講演会を開催いたします。被災者支援の最前線から、現場の声をお届けします！

- 日 時：2018年8月25日(土) 13:00～16:00
- 場 所：九州ビル5階 大会議室(福岡市博多区博多駅南1-8-13)
- ゲスト：清水 一雄 医師(日本医科大学名誉教授、金地病院名誉院長)
 渡會 泰彦 臨床検査技師(日本医科大学病理部) ※詳細は次号(111号)に掲載

たくさんのご支援を ありがとうございます

(順不同・敬称略)

合計	652,095円
*活動支援金	579,095円
*のぞみ21カンパ	4,000円
*雪だるま3号カンパ	4,000円
*東日本支援カンパ	13,000円
*おまかせカンパ	52,000円

(2017年11月～2018年1月分の寄付内訳)

●口座受付寄付

相川美智子 浅原望樹 稲毛修子 小野直子 梶原孝子 佐藤和子 渋谷けい子 白水明代 関根敏子 グループ・イーハトーヴ 田中直子 谷村禎一・牧子 種和子 富田明美 鳥巢多加子 西嶋香穂子 林田英明 深田俊江 松井岩美 村上和代 めぐみ保育園職員一同 森悠子 和田茉莉恵 和田由理

「都道府県別」

【神奈川県】	1名	【長野県】	1名	【静岡県】	1名
【愛知県】	1名	【兵庫県】	1名	【鳥取県】	1名
【島根県】	2名	【広島県】	3名	【山口県】	4名
【愛媛県】	1名	【福岡県】	44名	【佐賀県】	2名
【長崎県】	1名	【熊本県】	3名	【大分県】	7名
【宮崎県】	1名	【鹿児島県】	2名		

計76名(匿名含む)

●月々の定額寄付(マンスリーサポーターの皆さま)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井上礼子 植田清子 内野千鶴子 有働聡美 江原健一 延壽富美 大麻卓子 大久保伸子 大久保弘子 大崎知恵 太田昌子 大

場満 小黒慈子 落石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川崎君子 川崎清美 川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 後藤宇企子 財津耐代子 財津悠子 齊藤美代子 阪口香奈子 坂口馨子 佐々野也依 佐竹早苗 佐藤一江 佐藤進一 佐藤照子 白浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 綱脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子 永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野沙智子 西首延子 丹羽道代 納富育代 深川哲臣 福井初子 福本勅子 藤田優子 藤本孝子 洲田三輝 古川恵子 松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山さより 水本敬子 三野桂子 宮野義治 村西美由紀 村松知子 室屋芳乃 矢野和代 山下澄子 山中陽子 山本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子 渡邊真志子

計123名(匿名含む)

貴重なご寄付をお寄せ下さり、どうもありがとうございます。皆さまよりお預かりしたご寄付は、チェルノブイリ被災者医療支援、福祉工房のぞみ21支援、検診車雪だるま3号購入の積立、東日本震災歳被災者支援、事務費用等に当てさせていただきます。

皆さまからのメッセージ(一部抜粋)

●おいしい紅茶、これからも! ●地道で息永い活動に敬意を表します。いつも有難うございます。 ●久し振りの送金です。忘れてしまったり、タイミングが合わなかつたり。先日は上品なランチオンマットをありがとうございました。使つのを惜しく思っています。 ●素敵なキーホルダーありがとうございます! 嬉しい驚きでした。 ●少額ですが、お役立てください。忘れません。 ●少しですが、役立ててください。 ●コーヒーありがとうございました。マグネットもありがとうございました。 ●バラの刺しゅうの美しいマップトありがとうございました。 ●ずっと応援します。

講師派遣します

講師 派遣を行っています。お友達やグループ、地域の集まりでチェルノブイリ勉強会を開催してみませんか? 小学校や中学校の総合学習、大学の講義、社会人向け講座などへも講師派遣実績あり。福岡県以外の会場や、少人数の集まりでも伺います。まずは一度、事務局までお気軽にご相談下さい。

お知らせとお願い

振込 用紙は毎号同封させていたたた時にいつでも振込できるように、毎号同封してほしい」というご要望があったためですが、決してお振込みを強要するものではありません。恐れ入りますが、ご不要の方はご処分のほどお願い致します。

月々 300円から、手軽にチェルノブイリ支援! ゆうちょ銀行で、毎月26日に指定の額の募金を自動引き落とし。マンスリーサポーター募集中です。手続きは簡単。ホームページが事務局まで。
住所 を変更された方、通信が複数部必要な方、今後の資料送付を希望されない方は、事務局までご連絡下さい。

編集後記

今号から編集担当が変わり、それに伴い紙面スタイルが一部変わっています。これからは見やすい紙面づくりに努めます。5月のリュータさん来日予定、4会場それぞれの企画があります。お近くの会場にぜひご参加ください。(M・K)
通信の感想もお待ちしております。今年ホームページも改訂予定。ご期待下さい。(Y・T)

活動の様子や通信バックナンバーなどはホームページをチェック!

チェルノブイリ 医療支援

検索

地球にやさしい再生紙と大豆インクを使用しています